

エミリー・ディキンソンの「こもる」力

私たちがエミリー・ディキンソンの詩から学ぶことのできること

浜 田 美佐子

序論

エミリー・ディキンソン(Emily Dickinson, 1830-1886)の詩を読んでいると、「制約」というものが生きていく上で当たり前のように、私たちの行く手に立ちふさがりものであるように思えてくることがある。同時に、ディキンソンの詩を読んでいると、この「制約」を見据え、この「制約」を記録していくことが、ディキンソンがそうしていたように、自らの抱える「苦悩」の質を理解し、その「苦悩」から自らを解放する方法であるようにも思えてくる。「真実」は私たちが思っている程には恐ろしくはないということを、あるいはそうやって、「真実」を生け捕りにしたという自負心が私たちに静かな喜びを感じさせるということを、私たちはディキンソンの詩を通して学ぶのである。これを私は、エミリー・ディキンソンの「こもる」力と呼ぶ。

私たちは、高らかに歌われることのない感情や考えを人の目から隠そうとする。恥ずかしいことであるし、それを語ることには痛みが伴うからだ。私たちは、自分にそのようなものがついて回っていることを自分にすら認めたくないのだ。しかし、隠しておきたい感情や考えを外へ発表すると「こもる力」となるのだ。ディキンソンはこの「こもる」存在を、言葉の世界でも実人生でも、外へ発揮し「力」とすることのできた稀有な女性詩人である。

この「こもる」力は、私たちにも内在している。しかし、私たちはその存在を普段は見ないようにして暮らしている。認識すること自体が「痛い」からだ。この場合、「こもる」状態は、まだ「こもる力」としての潜在能力を発揮していない。力になっていないのである。一方、ディキンソンの詩のなかで、暗い詩かなと思えるようなものがあつたとしても、良く読んでみると、意外な程に健康的な状態にあることが分かる場合が多い。この健全さは、「こもる」存在を意識的に認め、「こもる」状態に「力」を与え、能動的な動きに変換したからこそ生まれる健全さである。「こもる」ことが、何か良くない否定的な、隠さなくてはならない存在なのだとしたら、私たちはそれを隠すから、それは「こもる」状態であるにすぎない。

しかし、光を当てて社会デビューさせたのであれば、それは自らを社会に接続し、社会からの認識を変える、能動的な「こもる」力となる。ディキンソンは新たな存在の形態として、「こもる」ものを「力」へと、育てていく。

普通であれば、私たちが育ててくれるのは滋養に満ちたスープである。しかし、ディキンソンの「こもる」力はスープとは違い、ひんやりとした、不思議な言葉の組み合わせの味がする。ストレッチ運動であるかのようになり、今まで使わなかった心の筋肉が意識される。そんな筋肉の動きに気付くことが最初は怖いから、ひんやり感がある。しかし、怖がらなくても良いと、「こもる」力となるべき生みの一撃のプッシュが加わると、「こもる」状態は欠落状態ではなく、向き合い、見つめ、自らが発表することで「こもる」力としての自由を得、伸びをして外に飛び出し、社会にその存在を認知される力となる。ディキンソンが、そう意識させてくれる。

ディキンソンの詩がそうであるように、私たち一人一人の固有なる「こもる」ものも、「力」という市民権を得ることができると考える。社会に貢献できる、生まれ出ることをむしろ社会が待ち望む存在として、記憶し直されるものとなり得ると考える。時にひんやりさせられるこの「こもる」力の「こもる」状態は、社会から弱者と考えられているマイノリティーの存在と酷似する。

私たちは人と違うことを恐れるから、主流派であると、無意識のうちに自らを「マジョリティー」(多数派)に合わせようとする。私たちは、他者のなかにある「マイノリティー」(少数派)性も、自己のなかにある「マイノリティー」(少数派)性も、否定して見ないようにして、自らを「こもらせて」いる。しかし、もし「こもる」ものを「こもる」力として発揮したのなら、「こもる私」というものも、自ら「私」であると迎え入れることができるかもしれない。エミリー・ディキンソンと私たちの「こもる」力への道のりは、いつも今ここにあるからだ。

自分の中に眠る「マイノリティー」性に「私の物」という自己認識を与え、私たちの認識を変革し、自分の中に眠る「こもる」マイノリティー性に新たな命を与える。自分の中に眠る「弱者—マイノリティー」性認識、自分のなかの「異物感」の認識をすると、私は「私」を恐れ

なくなる。

ディキンソンに、どのような「制約」があったのかは推測の範疇をでないが、ディキンソンがどのようにその「制約」を自分の「こもる」力へと規定し直せたのかの方法論は、考えることができる。それは、およそ次のようなものである。1. よく見る。2. 自分で考える。3. 他の物と比較してみる。4. 理解を促すために想像力の味付けをする。5. 明日への勇気を得る。6. 名声が自分の所に近づいてくるのを待つ。また、漠然とした「制約」の種類として、ここでは、1. 家、2. 社会、3. 名声、4. 苦悩、5. 「秋」をその舞台として考えてみる。方法論の6の「名声」と、舞台としての3の「名声」は同じ単語だが、前者は名声が「近づいてくるのを待つ」という動き、後者は「名声」という状態である。それぞれの機能もしくは質が違うものとして別扱いしてよいと、考える。実際のところ、この「動き」と「状態」が連動したときに、ディキンソンの詩は特にパワーを発揮する。

さて、この五つのフィールドで、前述の六つの方法論の幾つかの動きを、あるいは六つの方法論を五つのフィールドの幾つかで試しながら、ディキンソンの生き方や詩人としてディキンソンが大切にしてきたものをこれから確認していく。結論を先に言ってしまうと、これだけは決して捨てられないというものをすべて捨てることで自分を見つけることができた詩人、それがエミリー・ディキンソンである。先行きが不透明な現在の日本に住む私たちにとっても、ディキンソンのように「まわり」を捨てることによって鮮明となる自分のなかの「こもる」力を出現させることは、本質的ではないものを「捨てる」勇気を私たちに与えてくれるはずだ。「こもる」状態にあるものを「自分」で育て、それを「こもる」というエネルギーを孕んだ「力」として外に「見せる」ことを、私たちに可能にしてくれるはずだ。自分をもっと知ることができるようになるということだ。

その時、ディキンソンのもつ、想像の世界のアクロバットの「心と知」の筋肉運動の匠の技を、私たちは理解することができるのだ。また、このアクロバットの展開を通して、自分と自分が住む社会への贈り物としての「こもる」力を、私たちが自分の状況に応じて、適用できるようになると思う。ディキンソン詩の「こもる」力の理解を通して、私たちが必要に応じて自分の状況に適した「心の体操」をしながら、魂の再生を試みることができるのだと考える。生きる勇気をもつことができるのだと考える。結局のところ、私たちのもつ異質性以外に本当の意味で、社会に貢献できるものを私たちはもたない。他の人の持っているものは、他の人に任せればよいのである。

十九世紀のアメリカに勇気ある女性ディキンソンが一人で生きていた。私たちも勇気ある二十一世紀に生きる日本の女性や男性として、一人一人がそれぞれの「こもる」力を発揮してみよう。「まわり」を捨てて、自分の中の「こもる」ものを育てることで、社会という組織を、社会と等身大の「私」の心と知性で結びつけ、社会も個人も共に活性化してみよう。エミリー・ディキンソンをメンターとする私たちの「こもる」力の発揮の道のは、社会に繋がり、社会の変革に関わる。私たちもそんな「大志」を抱くことができるのではないだろうか。

ディキンソンの故郷であるマサチューセッツ州アマストにあるアマスト大学の卒業生（1848）の一人に、札幌農学校の設立に関わり、あの有名な「少年よ、大志を抱け」という言葉を残したとされるウィリアム・スミス・クラーク（William Smith Clark, 1826-1886）がいる。ディキンソンの四歳年上ということになるが、ディキンソンの残した手紙のなかにクラークの名前を数か所探することができる。クラークは、南北戦争に大佐として従軍もしたが、アマスト大学で化学、植物学、動物学を教えていた（1852 - 1867）。当時学長をしていたマサチューセッツ農科大学より日本の政府に乞われ、クラークは日本にやってきたが（1876 - 1877）、帰国後マサチューセッツ農科大学の学長の職を辞することになる（1879）。クラークは札幌農学校においてキリスト教的影響力を残し、アメリカの新しい農業経営を企画し、植物学や英語を教え、学生たちに大きな影響を与えたとされる。

一方、札幌農学校の二期生として入学することになった新渡戸稲造（1862 - 1933）は、クラークの「大志を抱け」の言葉を直接に聞くことはなかった。しかし、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学に留学後（1884）、徐々に自らのなかに生じた日本人としての異物感—「こもる」もの—に、「武士道」という言葉を与えることになったのだろうか。西洋に暮らす東洋人として、自分のなかの「こもる」ものに命を与え、後に『武士道—日本の魂』（1900）という本を発表することになる。マイノリティーの立場から、自分のなかの「こもる」ものを「力」として、自己の異物感を外の世界に発表したのである。新渡戸は渡米する前から「太平洋の橋」になろうとしていたと語っているから、自分の拠って立つ文化を説明すべく書かれた、その副題に「日本の魂」と記された書物の英語出版（著作権 1899；出版 1900）は、新渡戸の志の当然の帰結であったのかもしれない。

ディキンソンは一方、女性として主に、家の中で十九世紀のアメリカ社会を生きたことになっている。他国に留学をすることもなければ、本を出版して自分の考えを

広めようとすることや、先生になって直接後輩に影響力を与えることはなかったと思う。しかし、詩人として切磋琢磨するなか、自らの絶対的に「こもる」存在に光を当て、彼女の独特の詩を、一般的な意味での出版という「外」に対してではなく、友人への手紙や自分の手製の詩の束という「内」の世界に対して、「発表」したのである。幾重にも回りを取り囲まれた「出版」ではあるが、言葉を紡いで、「こもる」状態を「こもる」力へと「発表」することで、拡張していくアメリカの社会に「魂」の「こもる」力で応じ、結果的にその社会を批判するような、「社会」に負けない個人の「魂」の在り様を、「見える」社会への「見えない」個人からの「懸け橋」とするべく、絶対的な「マイノリティー」側の、社会には見えない「こもる」ものを「力」へと、掲げて、見せたのである。

1 自分の家—自分の住む所

ディキンソンが自分の詩の批評を求めて詩と手紙を送った1862年4月以来、1886年5月にディキンソンが亡くなるまでずっと手紙のやり取りのあったトマス・ウェントワース・ヒギンソン (Thomas Wentworth Higginson, 1823-1911) との交信により、私たちはディキンソンについてたくさんのことを学ぶこととなる。ヒギンソンは牧師として、南北戦争時には大佐として、また1857年にボストンで創刊された文学、科学、芸術、政治を扱う月刊総合誌『アトランティック・マンスリー』への詩や散文の寄稿家として、明らかにディキンソンと比べて存在感のずっと大きい七歳年上の男性の発表者である。そんなヒギンソンが二度ディキンソンをアマストの家に訪ねたことがあった。

一回目は1870年8月、二度目は1873年の12月。まず、その一回目の訪問の約一年前、1869年5月の手紙でヒギンソンがディキンソンに「とても会いたいと思っている」こと、「もし実際に手で触れることができたのなら」ディキンソンの詩や手紙のもつ「不思議な力」やディキンソンの人となりをもっと良く理解できるであろうこと、また「そんなに一人でどうやって生きていけるのかが分からない」という趣旨の手紙を書き送っている (L330a)。それに対して、ディキンソンは面白い返事を返している。

他のことを少し述べた後で、ディキンソンはこのヒギンソンの最後の指摘に対し、さりげなく、しかしはっきりと、「私が一人で暮らしていることに関心を示されましたが、出国移民にとって、国というものは自分の国でない限り意味をもたないものです。」 (L330) と謎のよ

うに返す。やや分かりづらい訳かもしれない。

「移民」という言葉には英語では入国移民 (“immigrant”) と、出国移民 (“emigrant”) とがあり、ディキンソンはここで「出国移民」という単語を選んだ。つまり、「中」を意識させる「入国移民」として「入ってくる」という考え方ではなく、「外」へと出ることを意識させる「出国移民」として別の国へと「出ていく」のであれば、それは自分を捨てることにつながり、自分のためにはならず、本末転倒であると、大文字の「出国移民」 (“Emigrant”) で表しているのだと考える。つまり、多くの人と会わずに一人で暮らすのは淋しくてつまらないだろうとヒギンソンは思うかもしれないが、より根源的な「わたし」との関係性を考慮に入れた時、自分を捨てることの方が利益を失うと、ディキンソンは述べているのである。

では、「一人でさびしく暮らしているわけではない」という趣旨の手紙を返したディキンソンは、自分の「家」との幸せな関係をもっていたのだろうか。いや、そうとも言いきれないのである。というのも、初めての訪問の際、ヒギンソンは興奮状態で自分の妻にディキンソンとの対話や感想を書き送っている。そのなかに、ディキンソンの「家」に関する台詞が記録されているのだ。

『家とは何だか教えてくださいませんか?』 / 『私には母がいませんでした。母親とは困った時に、急いでその人の所へ行く、その人のことでしょう。』 (L342b) とある。当時、ディキンソンの母親はまだ生きていた。だから、「家」と「母」を重ね合わせて表現していると想像することができる。つまり、喩として「家」のことを「母」に重ねて語っているのである。もちろん、「母」のことを「家」に託して語っているとも考えられる。どちらの場合でも、「家」の居心地はあまり良くないらしい。この「家」と「母」と「困ったこと」の組み合わせは、ヒギンソンの二度目の訪問の少し後の1874年1月のディキンソンの手紙でも、少しだけ違う形で表れる。そして、二つの記述を重ね合わせる時、ディキンソンの「家」に対する複雑な思いが聞こえてくる。少なくともそのように、ディキンソンはヒギンソンに伝えようとしている。

ディキンソン曰く、「私は子どもの頃、何かあると家へ走って帰りました。そこに待っていたのは畏敬の念 (恐ろしさ) でした。『彼』は恐ろしい『母』でしたが、ないよりましでした。先日あなたが私のもとを去った時、この避難所が私と共にありました。」 (L405)。別段悲劇的なそぶりのない文脈のなかに出てくるこの文章の意外な展開に、どのように反応したらよいのだろうか、私たちは考え始める。

ディキンソンが「避難所」と書いているのは自分の「家」のことだ。何か危険があった時そこに逃げていくところが「避難所」だから、辻褄はあってはいる。しかし「避難所」には、家庭のもつ温かさは感じられない。またどのような人称で「家」を表すかと考えると、「それ」(“It”)、と思うのだが、ここでは「彼」(“He”)とされる。「家」に対しては男性代名詞を使用するのか、それとも女性代名詞を使用するのかと聞かれれば、私たちは「彼女」を選ぶかもしれない。「彼女」(“She”)の方が家庭の温かさが感じられるからだ。しかしディキンソンは「彼」を選択する。「家」に対応する単語は、「父」よりは「母」かもしれない。しかし選択された「母」の前には形容詞が付いていて、「恐ろしい母」とされている。とすると、ディキンソンにとって、「家」は「父の家」として、母を系譜とする「女文化」が守られることなく、娘ディキンソンには違和感があるからこそ、「恐ろしい母」と表現されたのか。それとも、母が女文化の担い手とならず、「男文化」のサポートとして働いたから、女である自分を守れないそんな家を「恐ろしい母」として、ディキンソンは描いたのか。謎は広がる。

「家」のもつ暖かさは、ひんやりとさせられている。性別表現は、入り乱れて描かれる。「家」に対する私たちの予想は、覆される。全体としては、子どもの時のディキンソンも、四十代頃の大人となって手紙を書いていた当時のディキンソンも、「家」によって自分が願うようには守られてはいない、そのようなディキンソンがいることになる。と同時に、それでもあった方がまし、という客観的現状分析をディキンソンが、「家」を「避難所」であるとしていることに、私たちは反対に驚く。最高ではないが、最低限の保障はあると認識しているとするディキンソンの「家」と「自分」に対する「セルフ・ポートレート」。このポートレートは、不幸な家の被害者のものではない。災難を半ば乗り越えたサバイバーのものである。だから、私たちは二度びっくりする。ディキンソンの精神の強さに、私たちが怯むのだ。「こもる」力を見てしまった思いがするからだろうか。つまり、私たちは「制限的な家」と「その制限を超えるディキンソン」の二人(?)を見るので、驚くのだ。

先ほど引用した1869年の手紙では、「出国移民」の記述のあとに、ディキンソンのコメントが「私は父の土地を越えて他の家や町に出かけることはありません」と添えられている。「出かけること」がないことが「家」の住人、つまりディキンソンの意思なのか、それとも単なるディキンソンの習慣性的の問題なのか、それとも、「出かけること」が家族により推奨されていないのか、また

は「出かけること」の必然性が、「出国移民」になる必要がないのと同様、自分の存在の在り方を変える必要はないので避けたいということなのか、はっきりはしない。だが、何らかの「制限」条件が「家」にはあること、しかしその「制限」条件を見つめたうえで、ディキンソンがその「制限」をかいくぐったかもしれないことが想像されるのだ。

ならば、「制限」状態は、1. よく見る、2. 自分で考える、3. 他の物と比較してみる、4. 理解を促すために想像力の味付けをすることで、無化させられたのだろうか。ここにあるのは、「明るい」未来なのか。それとも、ひんやりとした「幸福」だろうか。少なく見積もって、「家」はディキンソンにとって「避難所」なのである。ディキンソンにとって「こもる」力の拠り所なのである。いや、むしろ「こもる」力は何らかの「制限」を受けることによって、「こもる力」を増大させるのだ。

2 社会と個人

「家」という、仮に「制限」状態のあるところに居続けた場合、そこに住まう「個人」の「社会化」もしくは「成長」というものは、どのように計ることができるのだろうか。あるいは反対に、「社会」の方が個人ディキンソンの「制約」となって、ディキンソンを「家」に、避難させているのだろうか。「家」の時と同様、やはり、1. よく見る。2. 自分で考える。3. 他の物と比較してみる。4. 理解を促すために想像力の味付けをする。そして、それらを経て、5. の「明日への勇気を得る」というところまで、ディキンソンは到着したのだろうか。私たちはそれをどうやって知ることができるだろうか。「家」を仮に出ないで、「社会」に対して、「私は立派だ」とどうやってディキンソンは説明することができるだろうか。そのことは、ディキンソンを悩ませたのだろうか。

魂と社会との関係を、ユーモアを交えて語る「魂は彼女自身の社会を選ぶ」(J303,F409,Fascicle20)を味わってみたい。一連ごとに私の訳も、拙いが、添えていく。

The Soul selects her own Society —
Then — shuts the Door —
To her divine Majority —
Present no more —

魂は彼女自身の社会を選ぶ—
それから—その扉を閉じる—
彼女の絶対的な「マジョリティー」に

対して—
 もはや姿は見せないのだ—
 Unmoved — she notes the Chariots
 — pausing —
 At her low Gate —
 Unmoved — an Emperor be kneeling
 Upon her Mat —

動かされない—二輪戦車が待っている
 のを—彼女は気付いているが—
 彼女の低い門のところ—
 動かされない—皇帝がひざまずいてい
 るとしても
 彼女の玄関の足拭きのう—

I've known her — from an ample
 nation —
 Choose One —
 Then — close the Valves of her
 attention —
 Like Stone —

私は彼女のことを知っているのだ—広
 大な国土から—
 一人を選ぶのを—
 それから—閉めることを、彼女の関心
 の弁を—
 石のように—

何たる壮大なヴィジョン、何たるウィット！こんなにも固く、こんなにもゆったりと「マジョリティー」という多数派である「社会」に対して、一人で門戸を開け閉めできる魂をもつ人を描けるとは。ちょっとした、ほら話のようでもあるが、「魂」の大きさを知る人、「魂」の大きさを描ける人、そして「魂」の「こもる」力を人知れず、いや、語り手がいたが、いずれにせよ、限りなく、一人で発揮できる人が、この詩を作ったエミリー・ディキンソン、その人ではないか。詩人は作家としてたくさんのフィクションを作ることができるのだから、この詩を詩人ディキンソンの実体験と限定する必要はないが、それでも、この「一人」の存在の大きさとその正当性を語る内容は、いままで見てきたことからしても、ディキンソンと限りなく同一の価値観を共有する人をディキンソンが描いていることが分かる。

この「魂」が、「社会」の秩序を作っている。外の「社会」が、秩序を作っているのではない。同時に、「魂」が作ろうとしているのは、内なる「社会」の秩序である。二つの「社会」は並存されているのだ。そのことを、「私」はどこからかそっと見つめているのか、「知っている」と言うのである。その「知っている」ということが、全ての存在証明となっている。これは、体験なのである。

方法を確認してみよう。まず、ディキンソンは、よく見ているだろうか。断固とした「魂」と「社会」の対比は、大文字で描かれた「魂」(“Soul”)と「社会」(“Society”)の[s]の頭韻で繰り返され、強調され、際立たされている。いや、待てよ、ここで対比と書いたが、対比されているのは、外の「社会」に対する、中の「個人」ではなくて、社会にすでに膨張しているかのように描かれる「魂」の、しかしながら「外の社会」には見えない、内なる「魂の社会」自体が、外の世界の「社会」と対峙させられているのではないか。「個」の存在と同意語でありそうな「魂」には、(“Soul”には「個人」という意味もあるが)、すでに外の「社会」が無化されたかのように、「彼女自身の社会」が存在しているのだ。外の「社会」と「魂」との関係は、「魂」と「魂」が「選」んだ「社会」との関係性によって、書き換えられている。ということは、ディキンソンは、1. の「よく見る」という範疇を超えて、すでに2. の「自分で考える」や、3. の「他の物と比較してみる」、そして4. の「理解を促すために想像力の味付けをする」まで一気に進んでしまっているのだろうか。

事実関係を見ていくと、外の具体的事物としては、「二輪戦車」と「皇帝」がある。両者ともに、戦う力と支配する権力をもっていそうである。そのような力を有するはずの存在が、「魂」側の具体例「低い門」と「玄関の足拭き」で、その武力、権力、財力を無化されている。これは、ディキンソンが「よく見る」ための考え方の例題として、具体的事物で対象物を捉えてから、補助線を引くような感じで、両者の「魂」に対する力関係を「待っている」(“pausing”)と「ひざまずいて」(“kneeling”)という行為を媒体として、梃子を応用するように転覆させて、「小」の「魂」が「大」の「二輪戦車」と「皇帝」という外の「社会」を代表する権威に勝つという逆転勝利を描いているから、可能となるのであろう。中の「社会」の方が、「魂」に対する影響力が強いと宣言しているのである。

「二輪戦車」と「皇帝」の強さは外面的強さにすぎないのだ。自らが自らの努力をもって、強くなったものではないからだ。強くなるべくして作られた、あるいは世襲の外面的強さにすぎない。みんながそうと信じている

強さにすぎない。一方「魂」側には強い意志が感じられる。繰り返される、強勢の置かれた「動かされない」(“Unmoved”)という言葉のリフレインでも明らかのように、「外」の影響を受けまいと、身構えて、外の力を意識しつつ、耐えている。「外」の力の大きさや誘惑の大きさを知りながら、「動かされない」と意思している。「魂」のプライドが見え隠れする。

しかしながら、一人での戦いなら、その戦い自体が知られない。「こもる」状態に終始する。だが、「魂」には目撃者がいた。「私」という語り手が、この「魂」を「知っている」と述べている。そのように、ディキンソンは語り手と「魂」と「魂」の「選」んだ「彼女自身の社会」を並べて見せる。「こもる」力が発揮されるのだ。口語的短縮形を利用した現在完了形の「ずっと見て知っている」(“I’ve known her”)という語り手の「私」と「魂」との親密性は、客観性を担保しないが、4. の「理解を促すために想像力の味付けをする」という「大」の「小」による転覆劇は、どんな市民が読んでいても、ある程度心地よい内容なのであり、拍手喝采のうちに、読者も信じることを選ぶことになる。この「彼女自身の社会」は、人数が少なすぎるのだから、本当の「社会」であると言えるのだろうか。少し首を傾けながらも、読者は客観性を問う前に、面白さでこの「魂」に引きつけられる。そのようにディキンソンは読者を誘導する。

「一人を選ぶ」行為を、しかもその選択肢は「広大な国土」で生きるたくさんの人々の中からの「一人」なのであるが、その選択理由ははっきりしないながらも、どこかで、きっと「魂」も、選ばれた「人」も、それを語る話者も「一人」であることを読者は織り込め、私も知っていた」と意識している。あるいは「一人」と「魂」とで「魂の社会」が構成されることに「異議なし」と、言っても良いような気が読者にもしてくる。5. の「明日への勇気を得る」という状態に、読者もいると、これは呼べるかもしれない。ディキンソンに自分が近づくような気さえ、読者はしてくるのだ。

つまり、社会とは、一人の人間とその人間を認める目撃者一人さえいれば、つまり、この詩を語る語り手が(実際は、詩作するディキンソンが)「まわり」——「二輪戦車」と「皇帝」——を一端「捨てて」、低い門と「玄関の足拭き」で守られただけの、「こもる」状態の、多分一人の「魂」(個人)の存在を認知しさえすれば、その「魂」が選択する「彼女自身の社会」として、社会は成立するという、ディキンソンは見せつけているのである。これだけは捨てられない個人のもつ「魂」さえ維持することができれば、ディキンソンの「社会」もまた同様に成

立することの、喩なのであろう。考え方の構造を、ディキンソンは示しているのだ。枠組みの提示である。

経済的で、万人が持つことができる、個人にフレンドリーな「社会」の構造ではないか! 誰一人、外の「社会」で疎外されたからといって、困ることはないのである。外の「社会」で認められなかったからといって、腐ることはないのである。「魂」が選択する「彼女自身の社会」は、それ独自の価値観をもっているからだ。これを支える構造が、詩のなかの語り手の「私」であり、この詩を読む読者の「私」なのである。また、ディキンソンの内なる「こもる」力が解き放つ「こもる」状態の「私」なのである。「社会」に眠る「マイノリティー」性をもつ、私たちがなのである。

話者も、読者も、そして多分作者のディキンソンも、描かれる「一人道」の壮大きさを想い、その志のぶれない選択眼に、「個人」が「社会」から孤立し見捨てられるのではなくて、「個人」の方が「皇帝」を前にしても「石のように」動ぜず、「玄関の足拭き」という日常生活を組み立てながら、自分の在り様を守り、自分の在り方を変えないことに、勇気づけられているのだ。読後感はまだまだどこか、ひんやりとしているかもしれない。いや、むしろ、ひんやりしているという事実を黙認したうえで、ミニマムな「彼女自身の社会」を、自己に「一人」を友として与えることで成立させる、しかも限りなくそれは自己の「魂」自身のことでありそうで、外からの訪問客ではなさそうな、この「魂」の志の強さに、ディキンソンの内なる「こもる」力が発揮されていると、言ってもよいのではないだろうか。

結論

実はこの後、3. 名声、4. 苦悩、5. 「秋」について書く予定であった。しかし、紙面の都合で、ここでまとめてみることにする。映画のプレビューではないが、予定していた内容に少し触れつつ、ディキンソンの「こもる」力を書き終えたい。

ディキンソンは「名声」を敢えて求めなかったことになっている。そもそも「名声」というテーマを四つ目にもってきたのは、「家」や「社会」と同様に、ディキンソンにとって、「名声」が彼女の行く手に「あなたはもっと有名になって名声を手にしなくてもよいのか」と、一般的成功という誘惑をちらつかせながら、「出版」しなかった詩人、「自分道」を進むディキンソンに対して、彼女の生き方を惑わせ、自分らしく生きることを「他者の基準」で「制限」するかもしれないことを、考えてみ

たかったからだ。また五つ目の「苦悩」に関しては、実は、今回の論文は苦悩を中心に考えてみたいと思ひ構想を練ったものなのであるが、大体がもっとも遠くあるものから書き始めるというスタイルを持っているが為、案の定、そこが発端であったのにも関わらず、そこに行きつけなかった。ここで取り上げようと考えていたことは、「苦悩」関連の詩が本当に「苦悩」に満ちているのか、意外にそうでもないのではないか、ということ再考してみることである。最後の「秋」は、あのあまりにも美しく、「苦悩」という言葉も挿入されている詩を味わうことで、本稿を書いている時の季節の秋と、人生の秋と、ディキンソンの「苦悩」の美しい作品への結晶を、「こもる」力の最終章に持ってきたかったのである。では、少しだけ、書き加える。

「苦悩のように気付かれることもなく」(J1540, F935, Set5)には幾つかのヴァージョンがあるが、ヒギンソンに1866年6月9日付けの手紙に同封したもので、考えてみる。「苦悩のように気付かれることもなく」過ぎていってしまったものは、実は夏だった。つまり気付いたら秋が来ていたのだ。そのときすでに「静けさ」は「蒸留された」ようになっていて、「黄昏時は早く始まり／朝は今までとは違う光を放つ」状態となっていた。その変化の様子を、冷たい空気や静けさが染みわたる様子に聖なるものを感じつつ、行ってしまったという淋しさと、目の前にすでに秋が広がっていて、それを薄々は気付いていたのかもしれない話者は、静かな、知ってはいたのだけれど知らなかった驚きのなかに、次のように続ける。

そしてこのように翼ももたず
船の助けも借りず
私たちの夏は軽やかに逃げていった
美しさのなかへと。

ディキンソンは「苦悩」も実は季節の変化のように、また別の段階へと姿を変え得ることを暗に示す。一方で何か欠けていくと、もう一方でそれを引き受けて、新しい命が生まれる。「こもる」ものでさえも、その光を放ち得ることの不思議の一つとして、突然の駆け足だが、私も少しだけ文字数が超過したことに気付かないうちに、本稿を終えたい。

夏は去った。しかし、秋が生まれた。何も無くなってはいない。力はずっと、生まれるのだ。

引用および参考文献

- Benfey, Christopher. *The Great Wave: Gilded Age Misfits, Japanese Eccentrics, and the Opening of Old Japan*. New York: Random House, 2004.
- Eberwein, Jane Donahue. *Dickinson: Strategies of Limitation*. Amherst, MA: The University of Massachusetts Press, 1985.
- _____, ed. *An Emily Dickinson Encyclopedia*. West Port, CT: Greenwood Press, 1998.
- Franklin, Ralph.W., ed. *The Manuscript Books of Emily Dickinson*. 2 vols. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1981.
- _____, ed. *The Poems of Emily Dickinson: Variorum Edition*. 3 vols. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1998.
- Fuss, Diana. *The Sense of an Interior*. New York: Routledge, 2004.
- Johnson, Thomas H. ed. *The Poems of Emily Dickinson*. 3 vols. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1955.
- _____, and Theodora Ward eds. *The Letters of Emily Dickinson*. 3 vols. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1958.
- 小枝弘和, 『William Smith Clark の教育思想の研究— 札幌農学校の自由教育の系譜』, 京都: 思文閣出版, 2010.
- 小林善彦, 『新渡戸稲造』, 『講座比較文学5 西洋の衝撃と日本』, 芳賀徹, 平川祐弘, 亀井俊介, 小堀桂一郎編, 東京: 東京大学出版会, 1973. 233-249.
- Habegger, Alfred. *My Wars Are Laid Away in Books: The Life of Emily Dickinson*. New York: Random House, 2001.
- 浜田美佐子, 『エミリー・ディキンソンという遺跡』, 『エミリー・ディキンソンの世界』新倉俊一編, 東京: 国文社, 2011. 292-318.
- マキ, ジョン・エム, 『W・S・クラーク—その栄光と挫折』, 高久真一翻訳, 札幌: 北海道出版, 1978, 2006. [John M. Maki. *William Smith Clark: A Yankee in Hokkaido*. Sapporo: Hokkaido University Press, 1996.]
- Nitobe, Inazo. *Bushido, The Soul of Japan— An Exposition of Japanese Thought (1899/1900)*. 『新渡戸稲造全集』第十二巻, 新渡戸稲造全集編集委員会編集, 東京: 教文館, 1969, 1984再版.
- _____. *The Imperial Agricultural College of Sapporo (1893)*. 『新渡戸稲造全集』第二十三巻, 新渡戸稲造全集編集委員会編集, 東京: 教文館, 1987.
- 新渡戸稲造, 『武士道: 日本の魂—日本思想の解明』, 『新渡戸稲造全集』第一巻, 矢内原忠雄翻訳, 新渡戸稲造全集編集委員会編集, 東京: 教文館, 1983再版.
- _____. 『帰雁の蘆』(1907, 1908) 『新渡戸稲造全集』第六巻, 新渡戸稲造全集編集委員会編集, 東京: 教文館, 1969, 1984.
- Sewall, Richard B. *The Life of Emily Dickinson*. 2 vols. New York, Farrar, Straus & Giroux, 1974.
- 山杵雅信, 『クラークと内村鑑三の教育』, 東京: 日新出版, 1981.